

市原市潤井戸西山遺跡D地点

2005

株式会社 諏訪商店
財団法人 市原市文化財センター

うる い ど にし やま
市原市潤井戸西山遺跡D地点

2005

株式会社 諏訪商店
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は、市内を南北に貫流する養老川がもたらした肥沃な平野と、山間部の緑豊かな自然環境のなかにあり、先史以来の多くの遺跡は、今日にいたる人びとの歩みを伝えてくれます。

今回の発掘調査は、店舗の建設に先立って実施されました。建設計画の策定にあたっては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず遺跡の一部について記録保存の措置が講じられることとなりました。当遺跡は、過去の発掘調査によって弥生時代や古墳時代中期の遺構が、大規模に展開していることが判明しており、今回の調査でも住居跡や多数の土器が出土して貴重な成果を得ることができました。

発掘調査によって得られた成果は、記録として将来に伝えると同時に、現在においても積極的に活用されなければなりません。市民の生涯学習意欲が年々高まりをみせるなか、本書の刊行を新たなステップとして、文化財の積極的な活用に、より一層心を砕いてまいりたいと考えております。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、ご指導、ご尽力いただきました、千葉県教育庁文化財課、市原市教育委員会、株式会社諏訪商店、佐藤清一氏、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成17年2月

財団法人 市原市文化財センター

理事長 石 川 剛

例 言

- 1 本報告書は、千葉県市原市草刈字尾梨194-1の一部に所在する潤井戸西山遺跡D地点の発掘調査報告書である。

遺跡の名称については、同一遺跡の調査・報告にあたって「草刈尾梨遺跡」と呼称することがあったが、平成15年度刊行の報告書以来、潤井戸西山遺跡で統一し、アルファベットの地点名を付けることとしている。
- 2 発掘調査は、店舗建設にともない、株式会社諏訪商店の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、事業範囲2,500㎡のうち、1,070㎡を対象として実施した本調査である。これは、同年度に市原市の国庫補助事業として当センターが実施した250㎡の確認調査の結果を受けたものである。
- 4 発掘調査、整理作業は、以下のとおりに行った。

発掘調査	平成16年6月22日～平成16年7月8日	担当	小川浩一
整理作業	平成16年11月1日～平成16年12月27日	担当	小川浩一
- 5 本書の執筆作成は小川浩一が行った。
- 6 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。

第1図	国土地理院地形図「蘇我」「海士有木」(1:25,000)
第2図	市原市基本図C-8(1:2,500)
- 7 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 8 本遺跡の財団法人市原市文化財センターの調査コードはセ390である。
- 9 本書に収録した出土遺物および記録類は、市原市教育委員会市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵、保管している。

本文目次

序文	2	土坑跡	13
例言	3	溝跡	14
第1章 はじめに	1	第2節 その他の遺構	14
第2章 検出された遺構と遺物	5	第3節 一括出土遺物	15
第1節 古墳時代	5	第3章 まとめ	15
1 竪穴住居跡	5	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第5図 001・002号遺物実測図	9
第2図 周辺地形図	4	第6図 002～006号遺物実測図	10
第3図 全体図	6	第7図 007～010号, 一括遺物実測図	11
第4図 断面図	8	第8図 潤井戸西山遺跡総括図	16

表目次

第1表 出土遺物観察表	17
-------------	----

写真図版目次

図版1 遺跡の位置と関連地形 (航空写真)	図版5 009・010号 009号 010号断面
図版2 調査前状況 調査風景 001・002号	図版6 遺物写真
図版3 001・002号遺物出土状況	図版7 遺物写真
001・002号 003・005号	図版8 遺物写真
図版4 003・005号 005号遺物出土状況 006号	図版9 遺物写真

第1章 はじめに

1 遺跡の概要

(1) 位置と環境

当遺跡は、市原市の北端を流れる村田川と、村田川の支流である神崎川とに挟まれた低位段丘面上に位置する。この低位面は、ほぼ一辺1kmほどの三角形に近い形状をしており、南端部が潤井戸地区を乗せる高位段丘面の段丘崖に接している。

標高は、段丘崖付近で標高18m、遺跡付近の北端部は13mと徐々に低くなり、水田面との比高差はわずかである。この低位段丘は、村田川下流域に形成された比較的広い沖積平野を塞ぐように伸びている。この沖積平野は、縄文時代中期ごろには最奥部の良好な漁場となり、後期には埋め立てられて湿地となったものと考えられている。

弥生時代中期後半には、後に触れるように、この広い低地の周辺に環濠集落が集中する。おそらく、この場所が当地における初期の水田経営の場となり、当遺跡の位置は生産地に接した特別な場所であったものと考えられる。

(2) 遺跡の概要

潤井戸西山遺跡（以下では単に西山遺跡とする場合がある）は、昭和59年度（A地点。鈴木1986）と平成2年度（B地点。半田1992）に発掘調査が行われ、平成15年度にもさらにもう1地点（C地点。高橋2004）の調査が行われている。

以上三度の調査の成果をみると、弥生時代中期後半と、古墳時代前期から後期を中心とした集落遺跡とすることができる。住居跡のあり方はきわめて稠密であり、重複が著しい。弥生時代の集落は180×130m程に復元される環濠を伴うものである。

古墳時代から奈良時代の集落には、柵列・門跡、掘立柱建物跡を伴っており、住居跡の一部は鍛冶工房として使われているなど、注目すべき点が多い。建物跡の一部は古墳時代後期の住居跡より古いとされ、柵列に囲まれた豪族居館という見方もなされた。しかし、多くの建物跡は時期が不明確であり、また、古墳時代の住居跡や出土遺物には一般的な集落跡との相違が認められないなど、古墳時代の豪族居館とは決めがたい要素がある。今回の調査は不十分なものであったが、今後の調査の進展を待って再検討する必要があるだろう。

(3) 周辺の遺跡

村田川下流域の両岸は、いち早く弥生時代人が集落を形成し、その後も古代の政治・文化の中心的な場所となった。

弥生時代中期後半には、左岸に菊間手永遺跡、菊間遺跡、大厩遺跡、西山遺跡、右岸には草刈遺跡と大規模な集落が形成される。多くは環濠をもち、台地の先端に立地する。また、村田川に面する低位段丘には、同期の方形周溝墓群が展開する中横峰遺跡が存在する。これらは、おそらく互いに視認できる位置関係にある。

古墳時代の集落は、調査されたものだけでも枚挙に暇がない。潤井戸地区周辺に限ると、神崎川を遡った位置にある下鈴野遺跡で前期の集落の全容が知られている。また、潤井戸地区の高位段丘の縁辺付近には、杉山古墳と高野前古墳という比較的規模の大きい前方後円墳をはじめとして、山王後古墳、小谷1号墳等の前方後円墳や大型円墳を含む古墳群が存在する。

2 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

今回の調査範囲は、国庫補助事業として実施された確認調査の結果を受けて決定された。確認の結果遺構を検出した範囲のうち、施工上切り土せざるを得ず、遺構の保護ができないと判断された東側地方道寄りの1,070㎡が対象となった。

なお、確認調査を実施した範囲の大部分が表土から0.5～1.2mに及ぶ攪乱を受けていた。攪乱は西側に向かって深くなる傾向があるが、確認対象範囲全体について、大半の遺構が調査前に失われていた可能性が高い。



第1図 遺跡位置図 (1:25,000)



第2図 周辺地形図 (1:5,000)

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 古墳時代

1. 竪穴住居跡

概要

調査によって検出された古墳時代の竪穴住居跡は、6軒ある。前期が1軒、中期が2軒、後期が3軒それぞれ存在するが、いずれも激しく攪乱されており、主に調査区縁辺部分にかろうじて住居跡端部が残存しているのみであった。

南側の住居跡2軒は、破壊された後の炉跡と思われる焼土が堆積している掘り込みのまわりに、土器片が散乱し、浅いピットが存在しているもので、竪穴住居跡の可能性が高いため、この項に含めるものとする。

001号跡

位置 調査区の南側に位置し、002号遺構と重複している。

形態 東側において、002号遺構と重複する可能性が高い。中央の焼土が堆積している地点付近を除いて、著しく攪乱されている。

構造 床面は、ほとんど残存していない。壁高は、掘り込みが確認されないため、皆無であり、激しく攪乱された周囲に土器片が散乱している状況である。中央の焼土が堆積している地点は、地山が焼けてはいるが、明らかな掘り込みがあり地面が硬化するほど焼けているわけではなかった。しかし、周囲に炭化物が存在することや、周囲の土器散布状況から見て、この付近に炉跡があった可能性があり、現段階では炉跡の残骸としておく。また、東側には炭化物が散乱しており、比較的大きな炭化材も出土した。

周囲には、小規模なピットが存在しており、南東側に存在する2カ所のピットP1～2は、支柱穴になる可能性がある。現状で、径25～30cm、深さ10～20cm程度を測る。出土遺物は、激しく攪乱を受けたため、出土位置は東にずれるが、ハケメのある甕①や、赤彩が施された壺③などが出土している。遺物の特徴等から前期の遺構であったと考えられる。

002号跡

位置 調査区の南側に位置し、001号遺構と重複している。

形態 西側において、001号遺構と重複する可能性が高い。001号遺構同様、著しく攪乱されている。

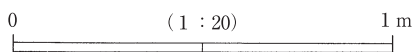
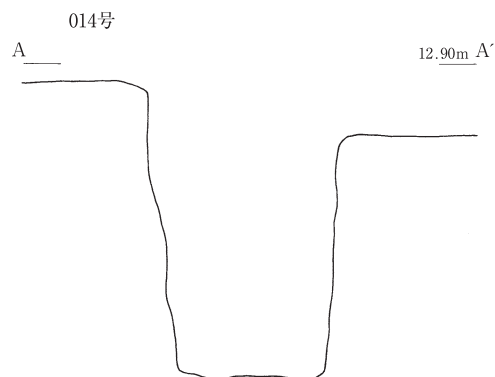
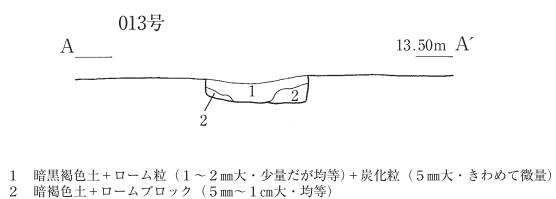
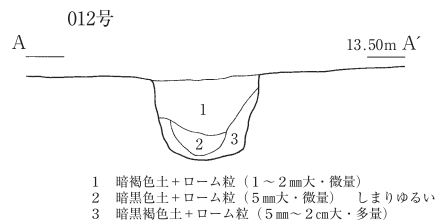
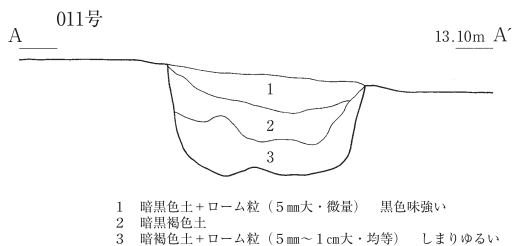
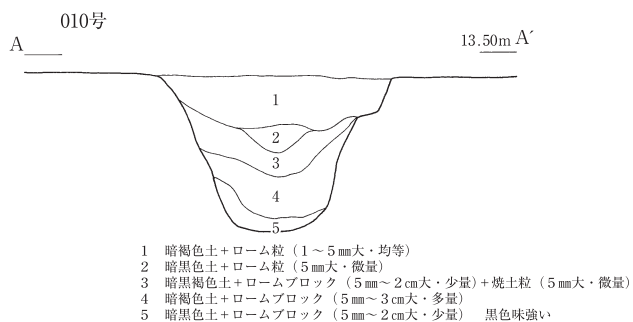
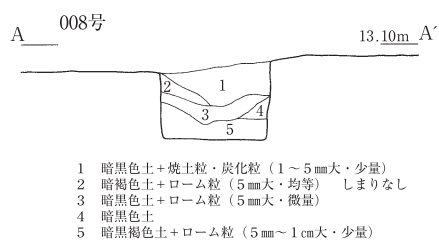
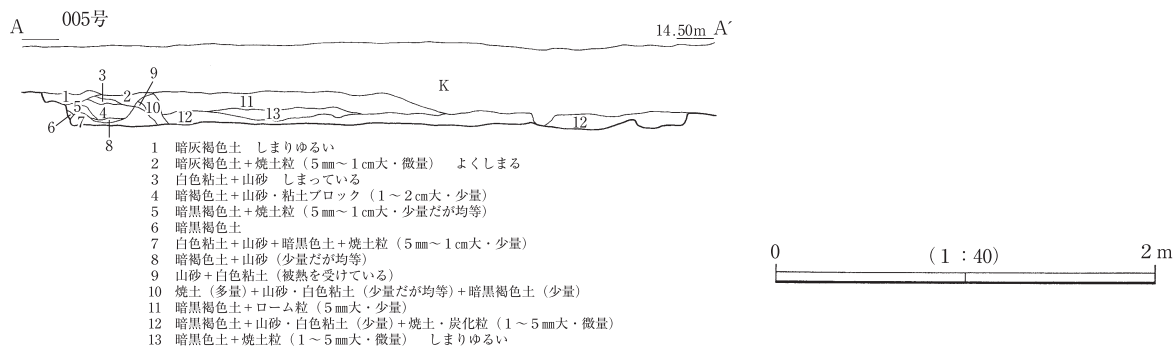
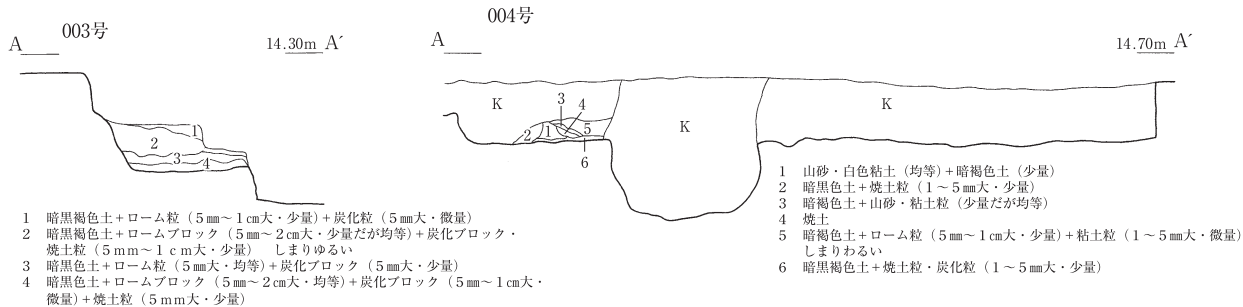
構造 床面は、ほとんど残存していない。壁高は、掘り込みが確認されないため、皆無であり、激しく攪乱された周囲に土器片が散乱している状況である。中央の焼土が堆積している地点は、地山が焼けてはいるが、明らかな掘り込みがあり地面が硬化するほど焼けているわけではなかった。しかし、周囲の土器散布状況から判断して竪穴住居跡だった可能性が高いことから、炉跡の残骸と判断しておく。



第3图 全体图

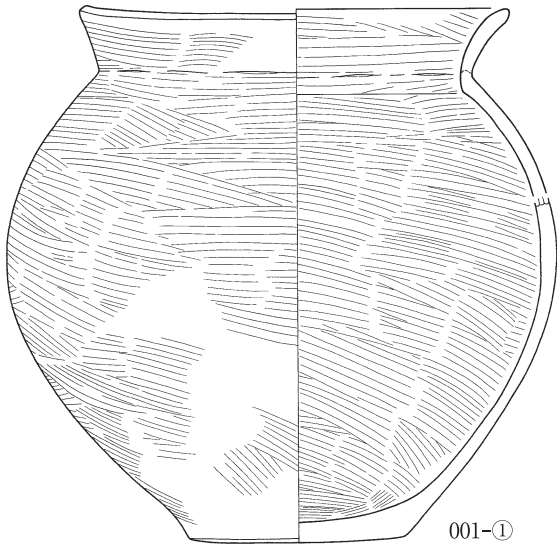


(1 : 150)

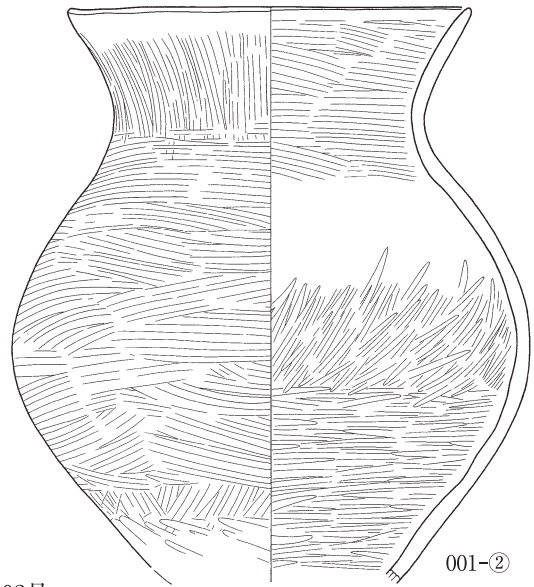


第4図 断面図

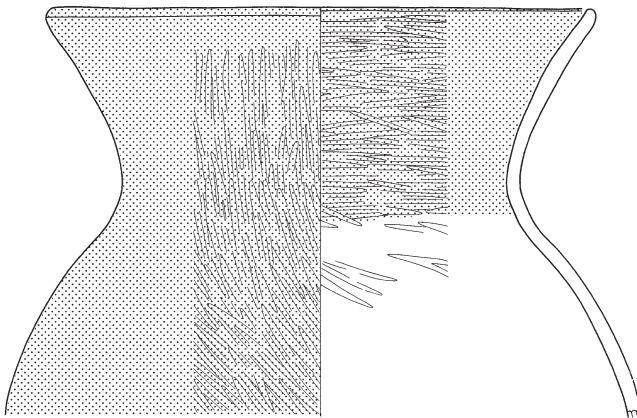
001号



001-①

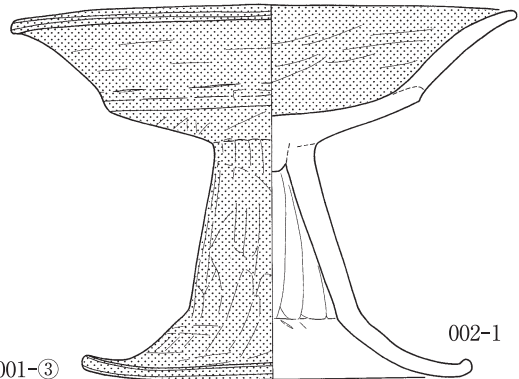


001-②

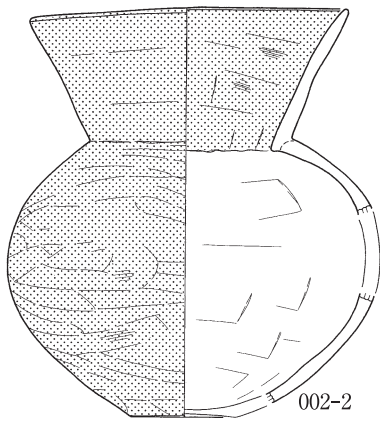


002号

001-③

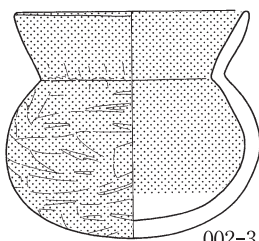


002-1

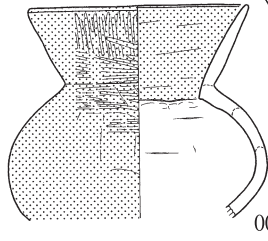


002-2

0 (1 : 3) 10cm



002-3



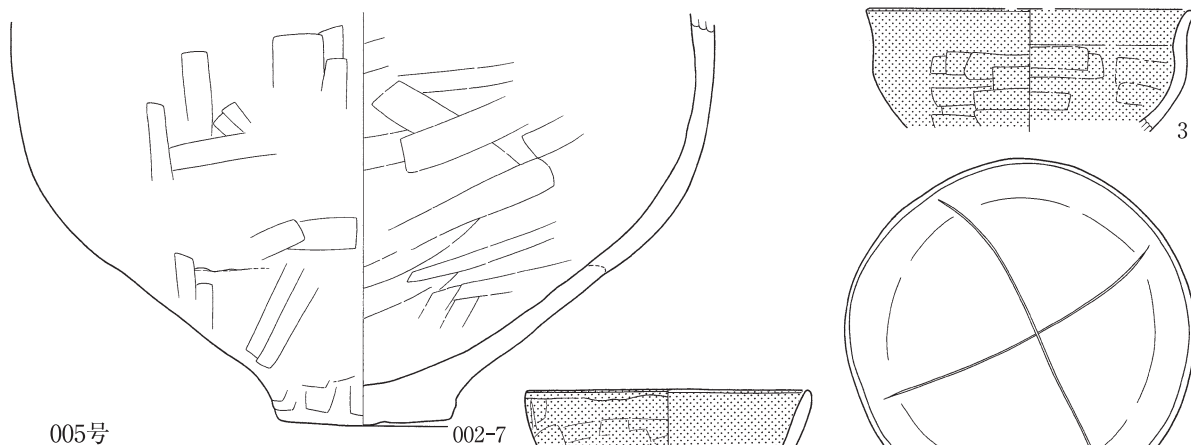
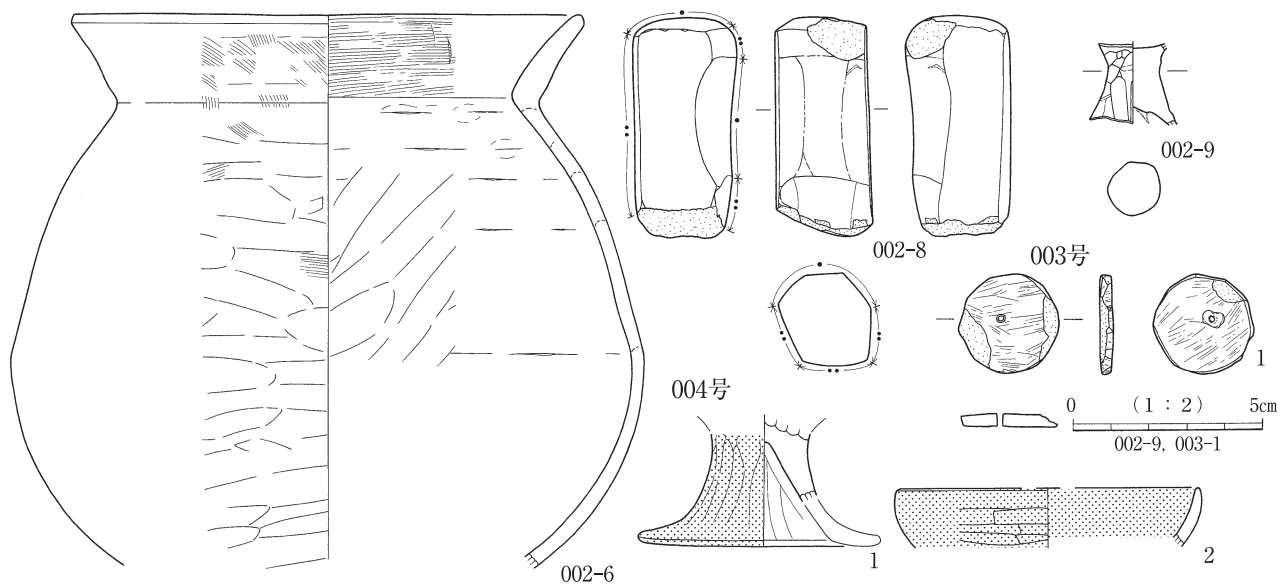
002-4



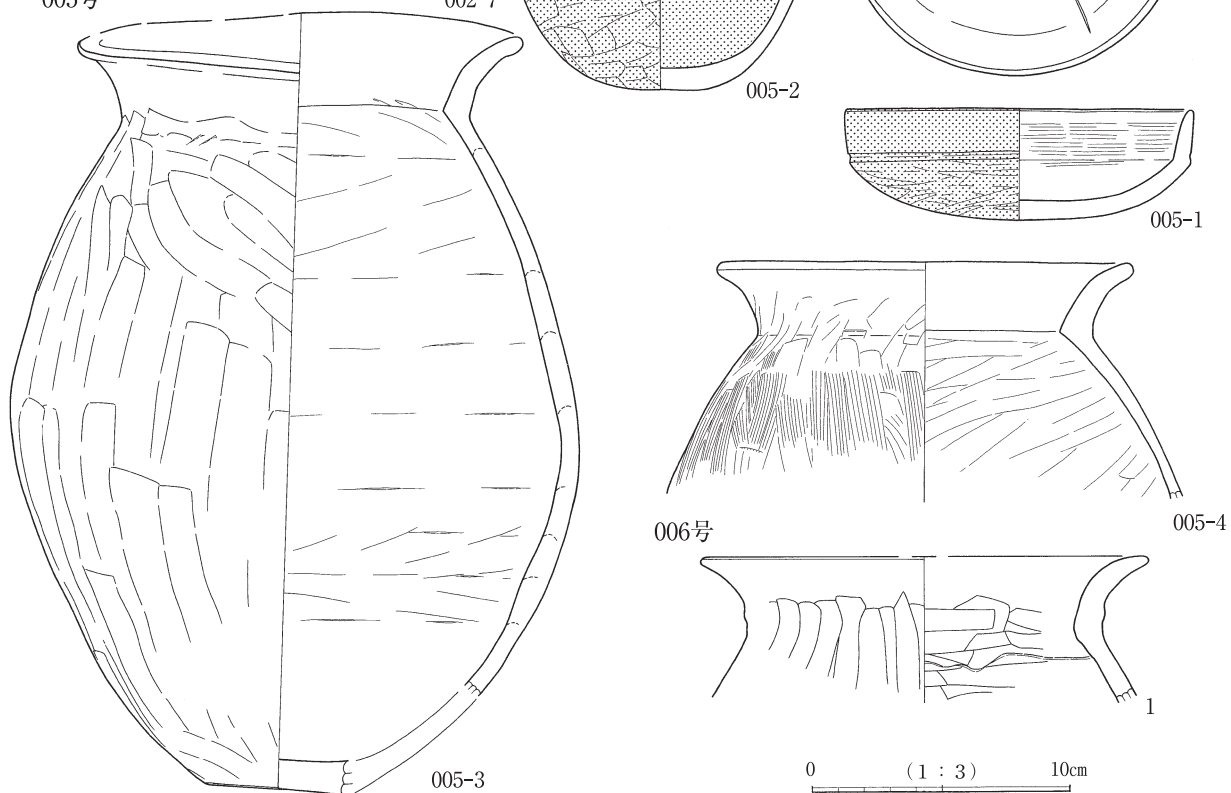
002-5

第5图 001, 002号

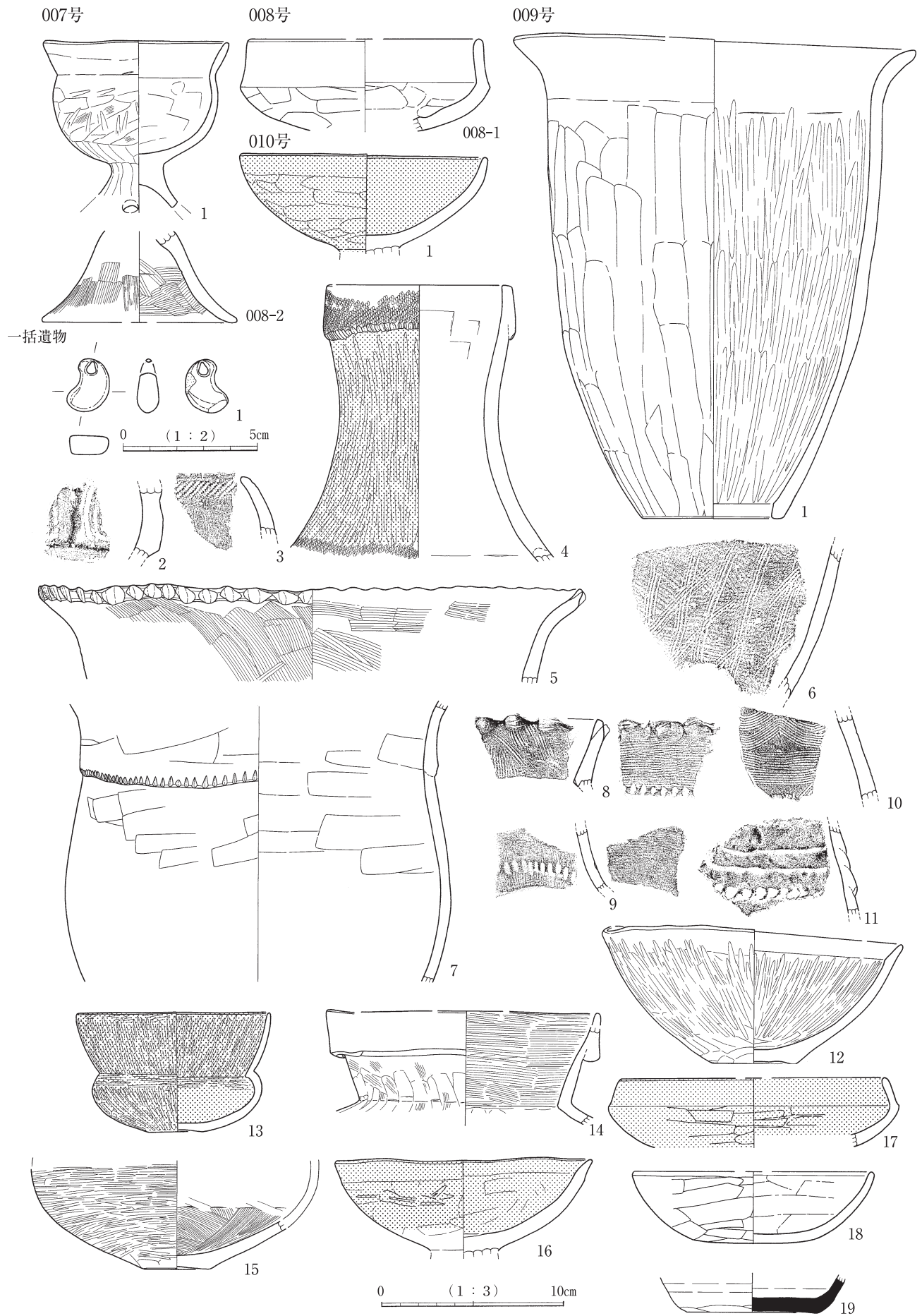
002号



005号



第6图 002~006号



第7図 007～010号，一括遺物

周囲には、小規模なピットが存在しており、炉を中心に存在する4カ所のピットP1～4は、支柱穴になる可能性がある。現状で、径25～35cm、深さ50～70cmを測る。出土遺物は、高杯1や埴2～4、ハケメの入った甕5・6や球形胴をしていると思われる甕7などが出土し、石器では抉りの入った柱状片刃石斧8、また高杯を模したと思われるミニチュアの土製品9が遺構及びその周辺から出土している。遺物の特徴等から中期の遺構であったと考えられる。

003号跡

位置 調査区の北側に位置し、北東側隅部で005号遺構と重複している。

形態 地方道に接する北側境界部分がわずかに残るのみで、他は、完全に破壊されている。一辺6m前後の方形を呈していたと思われる。

構造 床面は、あまり堅牢ではなく、床の硬化面はほとんど残存していなかった。壁高は、北側隅部で52cm前後を測る。

床面には、多量の焼土や炭化材が堆積しており、火災を受けた住居であると考えられる。住居内北西側にピットP1があり、柱穴の一部と考えられる。深さ29.8cmを測る。壁溝は検出されなかった。遺物は、破片資料ばかりで図示する資料に乏しいが、滑石製の石製模造品である有孔円板1が、覆土中より出土している。時期決定する根拠に乏しいが、中期の遺構であろう。

004号跡

位置 調査区の南東側に位置する。

形態 南側に接する境界部分がわずかに残るのみで、他は、完全に破壊されている。

構造 床面は、まったく残存せず、カマド構築材の残骸がわずかに残っているのみであった。また、住居内の北側にある支柱穴の残骸と思われるピットP1の掘り方が検出された。径80～85cm、深さ27cm前後を測る。遺物は、カマドのソデ部分付近より土師器杯2が出土し、周辺より高杯1・鉢3の破片資料が出土した。時期決定する根拠に乏しいが、後期の遺構であろう。

005号跡

位置 調査区の北側に位置し、北西側で003号遺構と重複している。

形態 地方道に接する北側境界部分がわずかに残るのみで、他は、完全に破壊されている。一辺6m前後の方形を呈していたと思われる。

構造 床面は、あまり堅牢ではなく、床の硬化面はほとんど残存していなかった。壁高は、あまり無く、10～30cm前後を測るのみである。

床面には、多量の焼土や炭化材が堆積しており、火災を受けた住居であると考えられる。住居内北西側にピットP1があり、柱穴の一部と考えられる。深さ51.5cmを測る。壁溝は検出されなかった。なお、北側セクションにおいて、カマドの構築材と思われる堆積土が検出され、この付近にカマドが存在していた可能性がある。遺物は、「×」の線刻がある土師器杯1や、甕3などが床面直上より出土し、鉢2や甕4が覆土中より出土している。鉢2・甕4は古相であるが、混入であろう。後期の遺構と考えられる。

006号跡

位置 調査区の北側に位置し、南西側で010号遺構と重複している。010号遺構に切られており、010号遺構に先行する。

形態 地方道に接する北側境界部分がわずかに残るのみである。方形を呈していたと思われるが、住居規模等は判断できない。

構造 床面は、あまり堅牢ではなく、床の硬化面はほとんど残存していなかった。壁高は、西側で10～20cm前後を測る。

住居内にピットP1が存在し、径70cm×88cm・深さ53cmを測る。貯蔵穴であろうか。壁溝が存在し、深さ8cm前後を測る。遺物は、土師器甕1が覆土中より出土している。遺物から、後期の遺構であろう。

2. 土坑跡

概要

調査によって検出された古墳時代の土坑跡は、3基ある。中期が1基、後期が2基それぞれ存在するが、いずれも周囲は攪乱されており、特に深いピットのみ残存し、他の多くが消失したと考えられる。

007号跡

位置 調査区の北側に位置する。

形態 不整な円形を呈し、平面規模は52×32cm・深さ22.5cmを測る。

構造 上面は、削平されてしまっており、遺構底面付近を測るのみである。遺物は、覆土中に土師器の台付埴1が出土している。前期末～中期初めの遺構であろうか。

008号跡

位置 調査区のほぼ中央に位置する。

形態 不整な方形を呈し、平面規模は66×70cm・深さ47.6cmを測る。

構造 かなり隅の張った方形を呈しており、上面は削平されてしまっている。竪穴住居跡に伴う貯蔵穴であった可能性もある。遺物は、底面直上より土師器杯1が出土している。覆土中からはハケメの入った高杯片2が出土しているが、混入遺物であろう。遺物の特徴から後期の遺構であろう。

009号跡

位置 調査区の北東側に位置する。一部、010号遺構に切られており、010号遺構に先行する。

形態 不整な円形を呈し、平面規模は80×78cm・深さ56cmを測る。

構造 上面は削平されてしまっており、竪穴住居跡に伴う貯蔵穴であった可能性もある。遺物は、底面直上より土師器甕1が出土している。遺物の特徴から後期の遺構であろう。

3. 溝 跡

010号跡

位 置 調査区の北側を，東西に横断している。006・009・014号遺構と重複している。006・009号遺構を切っており，両遺構より新しいが，014号遺構とは同時に併存していた可能性がある。

形 態 やや北東に曲がりながら，北東方向に抜けていくと考えられる。北東に行く程，深くなっていく。平面規模は40.4×1 m・深さ40～72cmを測る。

構 造 上面は削平されてしまっており，西側に行く程浅くなっている。激しく攪乱されている所の覆土は，攪乱土も混入してしまっているが，北東側の掘り込みはしっかりしており，覆土も攪乱土の混入は見られない。遺物は，覆土中に高杯の杯部1が出土しており，他には破片資料であるが土師器甕の胴部等が出土している。後期の遺構であろうか。

第2節 その他の遺構

1. 土坑・井戸跡

概要

出土遺物が無いため時期を特定することができないが，覆土の特徴から遺構であった可能性がある土坑及び井戸について，この項に含めるものとする。

011号跡

位 置 調査区の中央西寄りに位置する。

形 態 不整な方形を呈し，平面規模は106×48cm・深さ49.6cmを測る。

構 造 上面は削平されてしまっている。覆土は，暗黒褐色土を基本としている。遺物の出土は，なかった。

012号跡

位 置 調査区の中央北寄りに位置する。

形 態 不整な方形を呈し，平面規模は152×62cm・深さ47cmを測る。

構 造 上面は削平されてしまっている。覆土は，暗黒色土を基本としている。遺物の出土は，なかった。

013号跡

位 置 調査区の中央北寄りに位置する。

形 態 不整なやや隅丸の方形を呈し，平面規模は150×64cm・深さ11cmを測る。

構 造 上面は削平されてしまっており，遺存度はわずかである。覆土は，暗褐色土を基本としている。遺物の出土はなかったが，周囲の調査成果から縄文時代陥し穴である可能性がある。

014号跡

位置 調査区の中央北寄りに位置し、010号跡と重複する。

形態 円形を呈し、平面規模は121×107cm・深さ127.4cmを測る。

構造 上面は一部、削平されてしまっている。井戸状遺構と考えられる。図示できる遺物の出土は、なかったが、010号遺構に付随するものであった可能性がある。

第3節 一括出土遺物

概要

当調査地点では、調査前の攪乱が著しく、そのため一括遺物として掲載するしかない遺物が多数ある。ただし、これまでの潤井戸西山遺跡A・B地点など隣接地での調査成果を鑑みると、今回採集された遺物量は、攪乱前にあった遺物量よりかなり少ないと思われ、土砂の入れ替えが行われた可能性がある。

一括遺物1は石製勾玉、2は縄文時代中期阿玉台式期の深鉢片である。3～10は、弥生時代中期宮ノ台式期の壺及び甕片であろう。11は後期の甕片であろうか。12は古墳時代前期の鉢、13は中期の埴、14・15は中期の甕であろう。16・17は後期の高杯、杯である。いずれも赤彩が施されている。18は、非ロクロ成形の土師器杯であり、8世紀前半であろう。19は、須恵器杯である。千葉市域産であろうか。9世紀前半であろう。

第3章 まとめ

今回の調査では、古墳時代における遺構の一部を検出したにとどまった。遺構の一部は、調査区北側の地方道付近の境界部分に限られており、大半の部分は激しい攪乱を受け、遺構があったであろうとする残骸が残っているのみであった。したがって、多くの成果が推測に基づくものであることを断っておきたい。積年の課題である、潤井戸西山遺跡A地点で検出された門跡及び柵列の存在について、それと関連するような遺構の存在は見られなかった。ただし、攪乱によって消失してしまった可能性は否定できない。遺物は、弥生時代中期宮ノ台式期から平安時代前期にかけての土器片が採集された。また、古墳時代中期の有孔円板なども出土し、東隣する潤井戸西山遺跡B地点（草刈尾梨遺跡）の出土遺物と時期的に一致している。古墳時代中期における、まとまった遺構群が存在していたことは間違いなさそうである。

(参考文献) 鈴木英啓 1986 『潤井戸西山遺跡』 市原市文化財センター
半田堅三 1992 『草刈尾梨遺跡』 市原市文化財センター
高橋康男 2004 『潤井戸西山遺跡C地点』 市原市文化財センター



第8図 潤井戸西山遺跡総括図 (1:1,000)

第1表 出土遺物観察表

遺構 No.	種別	器種	遺存	色調	外面の特徴	内面の特徴	胎土	口径	底径	高さ	最大径
001	土師器	甕	60%	褐色	ハケメ	ハケメ	密	17.0	8.5	21.0	21.6
001	土師器	壺	50%	褐色	ハケメ 体部下半ヘラミガキ、赤彩か	口縁部ハケメ 体部ヘラミガキ、口頸部赤彩か	良	16.0	22.7	20.4	20.4
001	土師器	壺	40%	赤色	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、口頸部赤彩	良	21.6	16.0	25.0	25.0
002	土師器	高杯	ほぼ完存	赤色	ヘラケズリ、赤彩	杯部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ、杯部赤彩	良	19.8	15.4	14.7	19.9
002	土師器	卍	80%	赤色	ヘラケズリ、赤彩	ヘラケズリ、口頸部赤彩	良	12.5	4.0	16.1	14.7
002	土師器	卍	完存	赤色	ヘラケズリ、赤彩	ヘラケズリ、赤彩	良	9.0	2.0	10.0	10.0
002	土師器	卍	60%	赤色	ヘラミガキ、赤彩	体部ヘラケズリ、口頸部赤彩	良	8.6	8.4	8.0	10.2
002	土師器	甕	70%	褐色	ハケメ	口頸部ハケメ 体部下半ヘラミガキ	良	25.4	8.8	31.2	29.7
002	土師器	甕	80%	黒褐色	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	良	19.8	16.3	25.0	25.0
002	土師器	甕	40%	黒褐色	ヘラケズリ、赤彩	ヘラケズリ	良	7.0	7.0	11.8	27.7
002	石器	(挿入) 柱状片刃石斧	60% (刃部欠失)	灰色	刃先欠落、重量287.3g 砂岩		良	全長8.6	横長3.7	厚み3.7	厚み3.7
002	1	ミニチュア土器	60%	暗青灰色	ナデ、指ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラケズリ	良	1.9	2.4	2.1	厚み0.3
003	1	石製模造品	一部欠失	暗青灰色	車孔、細線部面取り整形は粗雑、滑石製、重量3.9g		良	全長2.6	孔距0.15	横長2.6	厚み0.3
004	1	土師器	50%	赤色	ヘラケズリ、赤彩	ヘラケズリ	良	8.5	5.2	9.6	9.6
004	2	土師器	口縁部のみ	赤色	ヘラケズリ、赤彩	ヘラケズリ、赤彩	良	11.8	2.3	12.0	12.0
004	3	土師器	50%	赤色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、赤彩	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、赤彩	良	13.0	4.8	13.0	13.0
005	1	土師器	ほぼ完存	赤色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、赤彩	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、赤彩 焼成前「×」線 刻施す	良	13.5	4.0	4.4	13.7
005	2	土師器	ほぼ完存	赤色	ヘラケズリ、赤彩	ヘラケズリ、赤彩	良	11.0	2.6	5.4	11.3
005	3	土師器	90%	褐色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	良	16.5	5.6	30.7	22.3
005	4	土師器	口縁部のみ60%	褐色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、一部ハケメ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	良	15.9	9.3	20.2	20.2
006	1	土師器	40%	黒褐色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部や強いヘラケズリ	良	17.3	5.8	17.7	17.7
007	1	土師器	80%	褐色	ヘラケズリ、ヘラミガキ 台部焼成前穿孔あり	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	良	10.2	9.6	10.4	10.4
008	1	土師器	60%	褐色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	良	12.8	5.1	13.9	13.9
008	2	土師器	脚部のみ80%	褐色	ハケメ	ハケメ	良	10.6	5.1	10.8	10.8
009	1	土師器	ほぼ完存	褐色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部強いナデ	良	22.3	7.7	27.0	22.5
010	1	石器	杯部のみ	赤色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、赤彩	ヘラケズリ、赤彩	良	13.7	5.6	13.9	13.9
一括	3	土師器	完存	暗青灰色	面取り整形 面取り穿孔、重量2.9g		良	全長2.0	孔距0.4	横長1.4	厚み0.7
一括	2	縄文土器	破片	褐色	降線に沿って角押文施す		良				
一括	3	弥生土器	破片	赤色	口縁部LRの斜細文、下端に刻み目施す 体部ヘラミガキ、下端にLRの細文帯めぐる 赤彩		良	9.7		15.4	14.3
一括	4	弥生土器	口縁部のみ破片	赤色	口縁部LRの斜細文、下端に刻み目施す 体部ヘラミガキ、下端にLRの細文帯めぐる 赤彩	ヘラミガキ、赤彩施す	良				
一括	5	弥生土器	口縁部のみ破片	褐色	口縁部指頭押捺による刻み目 体部ハケメ	口縁部指頭押捺による刻み目 体部ハケメ	良	30.0	5.1	30.5	30.5
一括	6	弥生土器	胴部のみ破片	黒褐色	ハケメが現状に入る	ナデ、ヘラケズリ	良				
一括	7	弥生土器	体部のみ60%	黒褐色	やや強いヘラケズリ 輪積み痕を残し、ヘラケズリで刺突し、刻み目	ヘラケズリ	良		15.8	21.5	21.5
一括	8	弥生土器	口縁部のみ破片	明赤褐色	口唇部指頭による刻み目 体部ハケメ	口唇部指頭による刻み目 体部ハケメ・下端にハケメ工具を刺突し、刻み目	良				
一括	9	弥生土器	頸部のみ破片	褐色	中央に刺突による刻み目施す	ヘラケズリ	良				
一括	10	弥生土器	胴部のみ破片	赤色	備状工具による6委単位の花状文、平行流線文施す 無文部ヘラミガキ、赤彩	ナデ、ヘラケズリ	良				
一括	11	弥生土器	破片	黒褐色	輪積み痕を残し、布押捺による刻み目を施す	ヘラケズリ	良				
一括	12	土師器	80%	褐色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	良	16.4	4.5	7.6	16.8
一括	13	土師器	完存	赤色	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	良	10.7	2.9	6.7	10.8
一括	14	土師器	30%	褐色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	ハケメ、体部ヘラケズリ	良	14.9	6.3	6.3	15.3
一括	15	土師器	30%	褐色	体部ヘラミガキ	ハケメ、ヘラケズリ	良	3.7	3.7	6.1	16.0
一括	16	土師器	杯部のみ	赤色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、一部強いヘラケズリ、赤彩	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、赤彩	良	14.2	5.6	5.6	14.4
一括	17	土師器	30%	赤色	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、赤彩	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、赤彩	良	14.7	3.9	3.9	16.2
一括	18	土師器	50%	褐色	ヘラケズリ	ヘラケズリ	良	13.3	5.0	4.0	13.5
一括	19	須恵器	底部のみ80%	褐色	口唇部調整 体部下踵手持ちヘラケズリ 底部手持ちヘラケズリ	口唇部調整	良	7.3	2.2	2.2	10.3

※径は、復元値を含む。高さは、現存高。

写真図版



草刈遺跡

草刈六之台遺跡

村田川

○今回調査地点

旧茂原街道

遺跡の位置と関連地形（昭和36年 国土地理院 撮影）



調査前状況（南東から）



調査風景（東から）

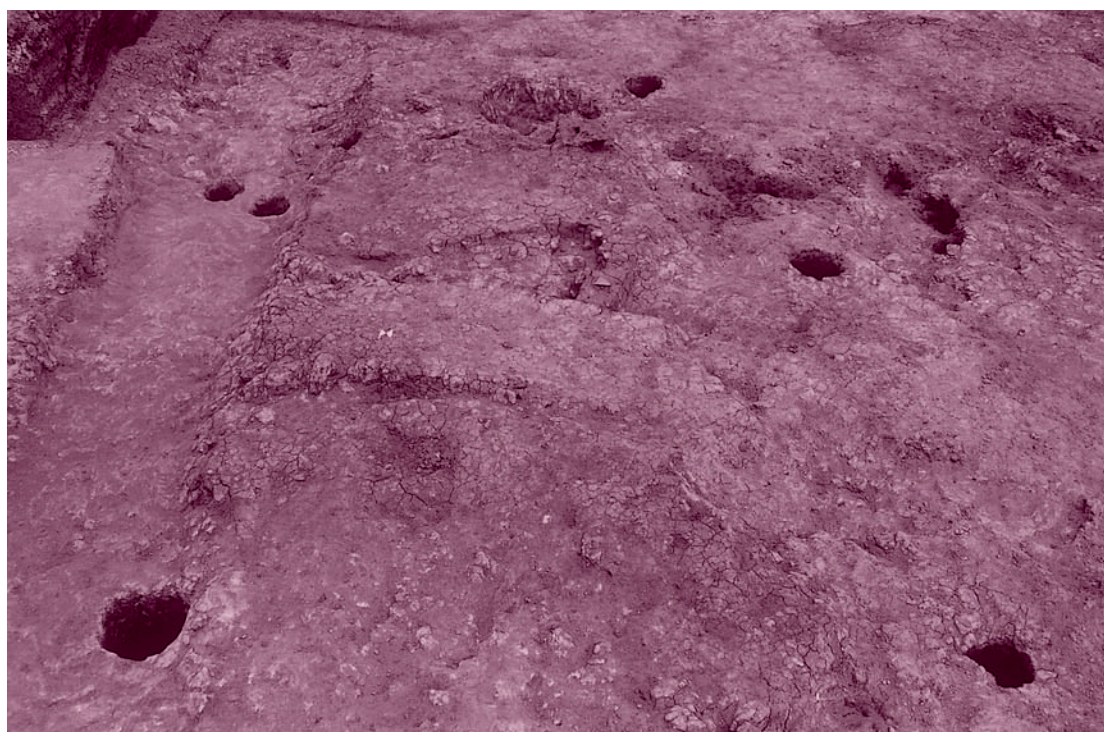


001・002号（東から）

001・002号遺物出土状況
(北東から)



001・002号 (東から)



003・005号 (南から)





003・005号（東から）



005号遺物出土状況
（東から）



006号（南から）

009・010号（東から）



009号（東から）



010号断面（東から）





001号-①



002号-2



001号-②



002号-3



002号-1



002号-4



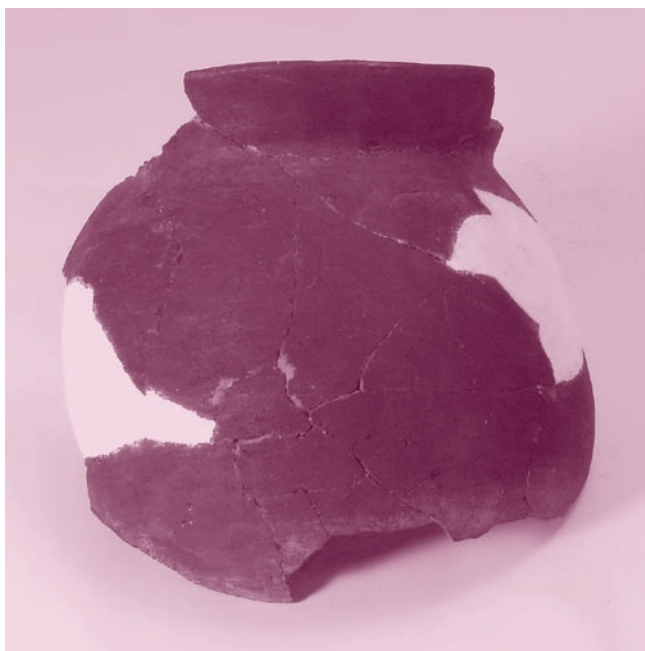
002号-5



004号-1



005号-1



002号-6



005号-2



002号-7



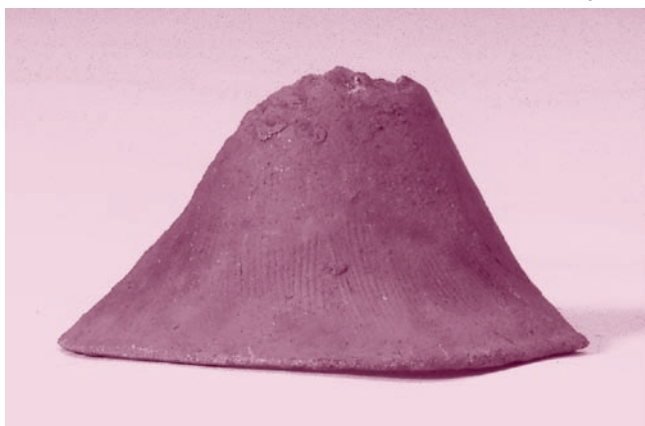
005号-3



005号-4



006号-1



008号-2



009号-1



007号-1



010号-1



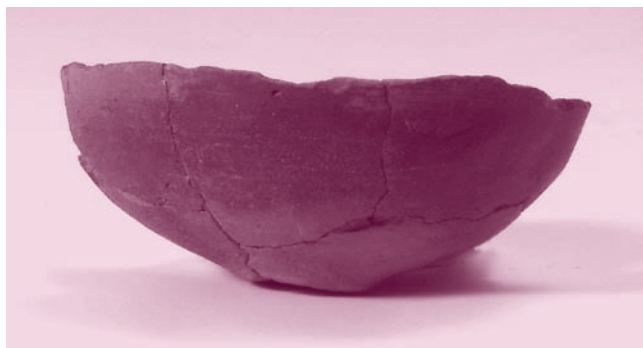
一括-7



一括-13



一括-12



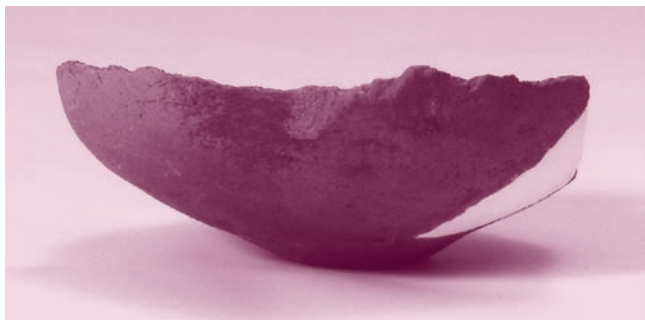
一括-16



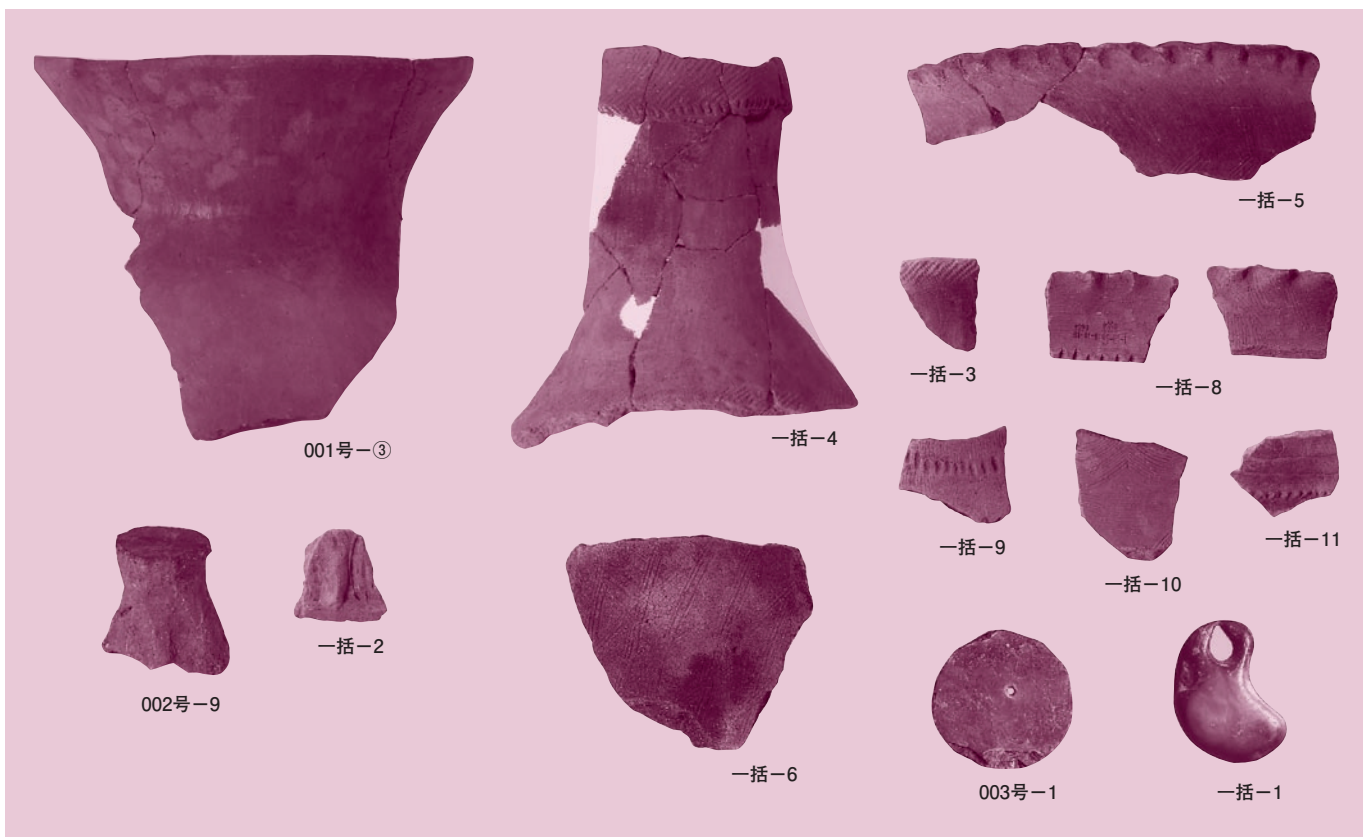
一括-14



002号-8



一括-15



報 告 書 抄 録

ふりがな	いちはらしうるいどにしやまいせき
書名	市原市潤井戸西山遺跡D地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人 市原市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第95集
編著者名	小川浩一
編集機関	財団法人 市原市文化財センター
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489 TEL 0436 (41) 7300
発行年月日	2005年2月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うるいどにしやま 潤井戸西山 遺跡D地点	いちほらしくさかりあざおなし 市原市草刈字尾梨 194-1の一部	12219	セ390	35° 31' 14"	140° 10' 14"	20040622 ~ 20040708	1,070	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
潤井戸西山遺跡D地点	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡6軒	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代中期の遺構が本地点にも及んでいることがわかった。

財団法人市原市文化財センター調査報告書 第95集

市原市潤井戸西山遺跡D地点

平成17年2月26日印刷
平成17年2月28日発行

編 集 財団法人市原市文化財センター
 発 行 株式会社 諏訪商店
 財団法人市原市文化財センター
 〒290-0011 千葉県市原市能満1489
 TEL 0436(41)7300
 印 刷 株式会社 正文社
 〒260-0001 千葉市中央区都町1-10-6